
これから

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これから

【Zコード】

N6196M

【作者名】

曇

【あらすじ】

これは、わたしがどのような人間なのかを再確認するためだけに書いているものです。
いかに自分を客観的に見れるかをさぐるために、
このような形で書かせていただきました。

要するに、くだらない人間失格の独白です。

まやまじめご（前書き）

こんなもの読まなくて結構です。
投稿してすみません。

おまじめ

読んで頂きありがとうございます。

そしてすみません。

これは自分勝手に御託をなべた

小説とは程遠いものです。

読んでも読まなくともたいして変わりはありません。

ここに書くのは、わたしの今あるすべてです。

まず、わたしの生に立ちから説明したいと思います。

小さい頃からわたしは親の「つゝ」とが聞けない「わるこ」でした。
そして上に生まれて出来たお姉ちゃんが一人。当たり前に親の愛情と
いうものはお姉ちゃんに
流れでゆきます。

何故お姉ちゃんのように育ててくれなかつたのかなんでは思いませんよ。

だつて、普通に考えて出来のよいものと悪いものがあるならば当然
よいものを選びます。

ペットだつて、病気持ちはよりも健康な仔がいいにきまつてますから。
そんな失敗作のわたしは、とにかく疎まれ屋でした。

「お前は、わるい」言われれば言われるほどわるいになります。
とりあえず、何が言いたいかといつと、居場所がありませんんでし
た。

こんな事を書いて、別に同情が欲しいわけではありません。同情で
は心は動かないと言つことは
よく学んでいるつもりです。

ではこんな恥ずかしい過去の話をして何になるかといつて、このよう^に育つと

こういう人間になりますよーという説明です。

ああ、でもこの説明では抽象的すぎて、どんな人間に育つてしまつのかは分からぬですね。

一言で書つと、わたしは『存在 자체が必要とされない』^{にんげん}存在になりました。

幼少時

人間という生物は、何のために生きているのでしょうか。

子孫繁栄のため？

いえいえ答えはそんな簡単ではない筈です。

そもそも自我を持つことを許された生物は、所詮その自我の中でしか考えられないだろうから、何のためなどという漠然な疑問には一人一人の自我によって

違うだろうと思います。

要するに、自分が何のために生きてるかなんて自分ひとりが決めるものであって
他人が干渉できないものなんです。

そして、わたしが生きている理由とは、一体なんなのでしょうか？
(こんな事書いても誰に問いかけてるんだとつっこまないでくださいね。もちろん自問自答です。)

もづ自分の中では答がでているはずです。

簡単な問題であって、つまりわたしは幸せになりたいのです。
幸福は良いものです。幸せのために生きることは、きっと幸せなものでしょう。

では幸せになるには？

・・・わたしにとつての幸せは、存在意義を認めてもらつた事でした。
多分普通の人間は、無償の愛でその存在自体を認めてもらつているのでしょ？。

しかしあたしは居る事自体ではなく、何の役に立つのかという目線で常に見られてきました。

そしてわたしにいる意味などありません。むしろ迷惑だつたりします。

世界中から『お前は何故ここにいる?』

と、問われているような錯覚に陥つたりしながら生きてきました。
そんな中で次第に自分は自分を否定するようになりました。
親に反抗し、いくら憎んでいても、本当はもつ心の中では
自分が一番悪いと分かつていました。

小学校2年生の時の出来事です。

夕飯を食べながらいつものように怒られ、殴られ、親がどうしても許せなくて

一緒に住んでいるおばあちゃんの所に、ほとぼりが冷めるまで居座つておりました。

おばあちゃんの部屋で寝ながら、今思つと怖い夢を見ました。

夢の中でお母さん泣き声がします。はっとなつてあたりを見回すとそこには

広い研究所のような場所でした。

真ん中には生首が一つ置いてあり、よくみるとそれはお母さんでした。

首のまわりは機械的なチョープやらなにやらでかこまれており、まだ生きている様でした。

どうやらお母さんは、自分の代わりに国に体を提供したらしくのです。

それを知つた瞬間、今までの憎しみが何なのかに気づきました。

責任転換です。

怒られる責任は全部自分にあるのに、役立たずなのも自分のせいなのに、

殴られるのもあたりまえのことなのです。

わたしは、それらを全部親のせいにしているだけでした。

その事実が一番怖いものでした。激しく自己嫌悪し、そしてその怒りをまた親にぶつけてしまつ。

悪循環でした。

思えば、この事実に気づかないまま大人になつたとしたら、そこまで自分は

不幸に感じることはなかつたのかもしれません。

もしそうなら全部他人のせいなのですから。自分が気負う必要もな
くなりますし。

気づいた頃にはもう遅い。

学校というところは、常に大勢の人間との関わりあいがありそのため差別やいじめが絶えない空間です。

そんな、いつ自分が墮ちるのかも分からぬ戦場で、よく世間の人々は戦つていられるなー

なんて思つていたりしましたが、結局出した結論は、皆様は高度に良く出来た人間であり、

逆に自分はそこまで器用になれない愚人という、またも悲しい事実でした。

そもそもいじめが起つる原因とはなんでしょう？

その疑問の答は実に簡単なものでした。

要は権力の競い合いです。

動物は本能的にも競争欲というものがあり、相手よりも勝つります。

じゃないと生き残れませんから。そしてそれは人間にもあてはまるでしょう。

自分よりも弱い者を蹴落としているのですよ。

そして、蹴落いじめるがわとした方は弱者よりも強い、弱者に勝つた、という錯覚に陥るのです。

それをみたほかの偽強者の「仲間」は、“こいつに逆らうと危ない”と感じるわけです。

まあ、簡単に言えば猿山のボス猿集団と同じ原理ですね。

(こんな比喩を使って、わたしは馬鹿にしてるわけじゃありませんよ。嘲つてはいますが。)

集団とは数がものをいう世界ですから、すぐに悪循環になりますな。でも、上で書いたとおりいじめのボスは偽強者であつて本物の強者にはなれません。

何故なら数がものをいう世界では、一人たりとも敵を作つてはいけないのです。

一人でもほころびがあればそこから布は崩れていきます。
ほかにも、次々ターゲットを変えたりしていなならば危ういです。
弱者連合ができますから。

こんな油断ならない状態がいやで、わたしは戦争を放棄しました。
薄っぺらい友情なんて要らないという考えです。

あえて集団から離れていき、一人の世界の住人になったのです。
元々性格の良くないわたしは、すぐにいじめられ？はじめました。
(正確にいうと、いじめられてはいませんね。自分でいじめられて
いるという実感がなかつたです。先生にいわれて氣づきました。)

・・・そういうえばこの話を親友にしたときに、
「それって、いじめじゃなくて疎外でしょ？」なんて言われたりし
て、たしかに、とか思つたり
しました。

とにかくいじめ改め疎外されていたわたしが興味を持ったことは、
人間観察でした。

最低な人間は、立派な人間に憧れを抱き、どうしたら近づくことが
出来るのか考えはじめるのでした。

最低な人間というものは、最低な考え方しか出来ないのでしょうか？わたしに限ってはYえだつたりします。

疎外されたわたしが、皆に対して抱いていた感情は「軽蔑」でした。それは自分が皆よりも劣っていたから、こう考へではなく、本心での軽蔑でした。

わたしは皆が知らないことを知っている。

いつか皆は、己の愚かさに気付くだろう。

そして、気付いたときにはもう底なし沼のなかだらう、

なんて考えていて、自分は皆より賢い人間だとまで考えていた頃でした。

なんて馬鹿だつたのでしょうか。

でも、そうしていることはわたしにとって、とっても楽なものでした。

何故つて、存在意義があつたからですよ。

心のどこかで、底なし沼にはまつてしまつた友達が、わたしに助けを求めるど。

そう思つていたんですけどね。

誇張はすぐに崩れ去りました。

だれも、そんなこと意識してすらいないのでした。

恐ろしい沼があることに気付かなくても、世界は平和に回るのでした。

わたしは、自分の世界で勝手に驕つて、勝手に潰れただけでした。

そうして、そんなことは氣にも留めずに遊びまわっている友達をみて

また、自分が必要とされていないといつ事に気が付くのです。

世界は知らない方が、幸せなでした。

世界は無知にやさしいのです。

わたしはこの時、自分の望みが叶わないことを知りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6196m/>

これから

2010年10月13日07時00分発行